

理論におけるヴィジョンとイデオロギー

高 島 善 哉

一 何が問題なのか

經濟學者ヨーゼフ・シュムペーターが科學者のヴィジョンについて言及したところから、わが國の經濟學者の間でもヴィジョンという言葉が使われるようになり、それがしだいに濫用される傾きがある。ヴィジョンはもとより單なる勘というようなものではない。また思いつきというようなものでもない。自然科學者といわず、社會科學者といわず、科學者がその研究を進めるに當って、勘や思いつきがしばしば非常に重要な役割を果すことについては改めていうまでもない。これを科學者の直感という言葉でいい表わすことができるであらう。ヴィジョンはまず第一にこのような意味での直感と同じものを指すように解されるであらう。

たしかあの有名な社會科學方法論に關する論文においてであつたと思う。マックス・ウェーバーは科學者の勘ないし思いつきについて語っている。科學上のすぐれた發明や發見はしばしば科學者の思いつきによることがある。しかしそれは科學者が自分の研究に全精力を打込み、その研究對象に没頭しきつているときに突如として出てくるものであつて、怠惰な科學者の頭腦から生まれてくるものではない。ウェーバーの言葉どおりではないけれども、彼はこのような意味のことを述べている。ウェーバーのいうとおり、科學者のすぐれた直感というのは、何よりも科學者の主觀的な緊張感と研究對象に内在しようとする努力から生まれてくるものであつて、それを外にして天來の着想を當てにすることはできない。科學者の直感というものは、この意味において、研究主

體と研究對象との緊迫した合一感を指示するものだということができる。

ヴィジョンはこのような意味での直感とはまったくちがったものではないとしても、必ずしもそれと同じではない。私たちはまずこのような意味でのヴィジョンという言葉の濫用を避けなければならない。

それではヴィジョンとはどういうものなのか。シュムペーターが「經濟分析の歴史」の中で用いたきわめて簡潔で適切な表現によれば、ヴィジョンとは「分析以前の認知」である。改めていうまでもないことながら、科學というものは事象の分析から始まる。分析のないところに科學的認識というものはない。しかしながら分析という仕事は綜合という仕事と離れては考えられない。分けられたものが何かの形でふたたび結びつけられることを豫想しないで、ただ單にあるものを分けるということは無意味な仕事である。私たちがあつたものを分析するというのは、そのものをただ單にばらばらに切斷するのではなく、分けられたものの相互の關係を思い浮かべながら分けていくのであるから、分析の仕事は當然に綜合の仕事と表裏の關係にあることはいうまでもない。分業が

協業から離れてありえないように、分析は綜合を離れてありえないのである。

すでにこの簡單で基本的な眞理から、私たちはシュムペーターの言葉をまず一般的に理解することができるであらう。ヴィジョンとは「分析以前の認知」である。ある程度經驗的素材に習熟して、それを科學的に克服しようとする努力を傾けていく間に、私たちの心の中には、しらずしらずのうちに、その經驗的事象についての一つの全體觀というやうなものが浮かび上ってくる。あるいはその經驗的事象をみる目というものができ上ってくる。何がそこにあるのか。何が本質的で、何が非本質的な事象であるのか。そしてこれらの本質的な事象と非本質的な事象はどのようなしきたで關係し合っているのか。つまり、雑多な經驗的事象がどのような仕組みをもつて私たちの前にあると考へられるのか。これらの點に關して自然にある一定の見方が成熟してくるのである。シュムペーターが「分析以前の認知」というのはこのやうなものと解することができるであらう。

このようにいえば、ヴィジョンは結局さきほど述べた勘であるとか、思いつきであるとか、あるいは直感であ

るとか、そういったものと本質的にはちがいはないではないか、という反問があると思う。いかにも本質的には兩者の間にちがいはないといってよい。しかしながら、シュムペーターがヴィジョンという言葉を使ったときには、そのような勘であるとか、思いつきであるとか、あるいは直感であるとかいわれるものを、ただそれだけとしてとり上げているのではなく、理論と結びつけてとり上げているというところに彼独自の發想法があるといえる。ヴィジョンはまだ科學的認識ではない。しかし科學的認識であるところの理論認識から離れてあるものではない。その點でヴィジョンは單なる勘や思いつきや直感ともちがうのである。シュムペーターがヴィジョンをもって「分析以前の認知」であるといったのは、このようなことを意味するものと解してよいであろう。

ヴィジョンはこの意味において理論から獨立にとり上げられることはできない。もろもろの理論的分析が全體として一つのまとまりをもつためには、あらかじめ一つのヴィジョンが與えられているものといわなければならぬ。他方において科學者のヴィジョンが成立するためには、理論的分析の努力が不斷につき重ねられなければならない。

ならないことはいうまでもない（これは先人の學說や業績を研究することから學びとられることも非常に多い）。しかしこの後の面はしばらく度外視するとすれば、ヴィジョンは理論的分析に方向を與え、科學者を單なる分析のための分析という迷路から、方向感覺をもった分析へと導いていく力をもつものだといわなければならない。すぐれた科學者となるためには、私たちはすぐれたヴィジョンをもたなければならない。理論のないヴィジョンはまだ十分に科學的な認識だということとはできないとしても、ヴィジョンのない理論はスコラ主義の迷路に陥るはかばかろう。私がここで理論におけるヴィジョンについて問題としたのはこの點なのである。

けれどもこれだけではまだ問題の意味がつくされてはいない。というのは、もしヴィジョンというものを以上のように解釋するとすれば、ヴィジョンとイデオロギーとは同じものとはならないか。もしヴィジョンが「分析以前の認知」であり、科學的認識にとって一つの指導的な役割を果すものだとなれば、それはイデオロギーと本質的に同じ役割を果すものだといえないであらうか。このような疑問が直ちに私たちの中に起ってくるで

あろう。簡単にいえば、理論との関係において、ヴィジョンとイデオロギーとは同じものだと考えてよいのか、それともちがうものだと考へべきなのか。私が問題としたのは實はこの點なのである。

この點について大いに參考となるのは、シュムペーターが雑誌「思想」の一九四九年九月號に寄稿した「科學とイデオロギー」という一論文である。彼はこの論文において、「科學的行爲はそれ自體として、われわれに價值判斷ないしはある特定の利益の擁護者たる使命を放棄することを要請するものでない」ということを強調することが肝要なのである。」(二頁)と述べて、理論形成のイデオロギー的背景について私たちの注意を向けている。ところが理論形成の背後にあるイデオロギーというものは、それ自體としてはまだ理論ではないから、理論分析によつてその眞理性を實證しなければならぬ。しかし科學者はその科學的行爲を始めるに當つては、先人あるいは同時代人のものの方、利害關心などからまったく獨立に出發することはできないのであるから、どんな理論でもそれを形成する科學者の實踐という立場から考察すれば、一つのイデオロギー的性格をもたざるをえない

ことにならう。この點でヴィジョンとイデオロギーとは理論に對して同じ關係に立つものということができよう。シュムペーターの説述によつてもこの點は必ずしもはつきりしないうらみがある。彼はこんなふうにもいつている。すなわち「イデオロギーが一〇〇パーセントまで立證可能な眞理を含むこともありうる」ということを是認するなら、この場合にはヴィジョンは本質的にイデオロギーである」(同上七頁)。

しかしながらヴィジョンとイデオロギーに關するシュムペーターの説述は、少くともこの論文に關するかぎり、必ずしも明快であるようにには思われない。私たちは直ちに、ヴィジョンとイデオロギーはいつたいどういう關係にあるのかという疑問をもたざるをえない。とくに理論を構成するに當つて、ヴィジョンとイデオロギーがそれぞれどんな役割を果すのか。その點についてもっと立入つた分析を求めたくなるであらう。シュムペーターはこの論文の中で、スミスとマルクスとケインズを引合ひに出して彼の問題點をより具體的に解明しているけれども、多くの讀者は、おそらく私がここに提出したような問題點についてなお疑問を残さざるをえないにちがひ

ない。とくに「イデオロギーが一〇〇パーセントまで立證可能な眞理を含むこともありうる」ということを是認するなら、この場合にはヴィジョンは本質的にイデオロギーである」というシュムペーターの言葉にぶつかったとき、私たちは理論構成におけるヴィジョンとイデオロギーの關係について新しい問題關心をもたないであろうか。

二 ヴィジョンは眞實だが、イデオロギーは虚偽であるのか

ヴィジョンとイデオロギーとのちがいに關する私たちの疑問は、シュムペーターの遺著「經濟分析の歴史」においてきわめて明快に答えられている。すなわち、彼はそこでは(第一編第四章)この兩者をはっきりと區別している。

シュムペーターによれば、ヴィジョンとは科學者がその仕事を始める前にすでにもっている認識のことである。この認識はまだ科學的分析によつて嚴密に規定され、十分に展開されてはいないけれども、科學者がその分析を進めるに當り、すでに出發點において念頭に思

浮かべている認知活動によつてえられるものである。だからヴィジョンとは科學的認識以前の認識であり、科學的過程における分析以前の認知活動であるといふことができる。

このことをシュムペーターのテキストに従つてもう少し詳しく述べると、だいたいつぎのようになる。私たちは科學的な研究を行なう場合には、私たち自身の仕事を先人の仕事から出發させるのが實際であつて、そもその最初からこれを始めることはほとんどないのであるが、かりにそもその最初から始めるものと假定しよう。そのためにはまず、私たちの分析的勢力の對象たるに値するものとして、「明確な一組となつた密着した現象」を頭の中に描き出さなければならない。換言すれば、「分析的勢力に當然先行するものとして、分析的勢力に原材料を供給する分析以前の認知活動」がなければならないのである(「經濟分析の歴史」東畑譯一の七九頁)。

ところがイデオロギーというものはこれとはまったく性質のちがつたものである。それは私たちがものをみようとするときに、どうしても免れることのできない社會的な立場の制約を表わすものと理解される。私たちがど

んなに正しく、客観的にものをみようとする努力しても、私たちの認知活動や認識活動がしらずしらずのうちに、ある偏りをもち、したがって客観的でなくなるということは十分にありうることである。それは単に科学者の努力の不足というようなことによるのではない。また単に科学者の氣質の問題に止るのではない。それは科学者がおかれている環境なり、社会的地位なり、そういったいわゆる社会的な興件と深く結びついている。簡単にいえば、イデオロギーとはある特定の社会的利害を代辯するものとしての認知活動なり認識活動であるということが出来る。シュムペーターはイデオロギーというものをだいたいこのように理解しているようである。そしてこれは今日の社会科学者の一般的な理解と一致している。

シュムペーターの著作の特色は、もちろんこのようなイデオロギー概念を設定したことにあるのではない。だれでも知っているように、このようなイデオロギー概念の設定はマルクスの仕事であって、それが今日の社会科学者の共有財産となるに至ったものである。シュムペーターもこの点におけるマルクスの功績を高く評価している。そのことは同時にシュムペーターの社会科学者とし

ての幅の廣さを物語るものとして評價しなければならぬ。

シュムペーターの特色は、このようなイデオロギー概念に對してヴィジョンの概念を設定し、——もしこのようにいうことが許されるなら——對抗させようとしたところにあるといえる。イデオロギーは人々の願望や意欲や利害關係と結びついている。だからそれは理論認識を歪め、一方的に傾斜させる危険をもっている。だからまた、イデオロギーは理論認識の眞實性を汚し、科学者を偏見のとりことする危険がある。シュムペーターは好んでイデオロギー的偏見とか、イデオロギーの汚れとか、そういった表現を使っている。經濟理論家としてのシュムペーターの仕事は、理論をイデオロギーの汚れから純化することにあつたといえる。少なくとも彼が經濟學の歴史を書くとしたときに、そのライトモチーフの一つとしてその點が考えられていたことは、その序文によって明らかである。

ところがヴィジョンは、すでに述べたように、理論にとって本質的に重要なものである。それは理論的認識以前の認識であり、認知であるから、科学者はそれなしに

は一步も前進することはできない。すぐれた社會科學者は何よりもまずすぐれたヴィジョンの持ち主である。たとえば經濟學者ケインズのヴィジョンは、第一次世界大戰後もはや老境に入つた資本主義の現實感覺によつて裏づけられ、そこから培養されたものである。そのヴィジョンは一言でいえば、資本主義の沈滞ということである。シムペーターによれば、これは一九一九年に書かれたケインズの名著「平和條約の經濟的歸結」の中のみならず、數頁の間に讀みとられうるという（「經濟分析の歴史」同上八一頁）。いうまでもなく、經濟學者としてのケインズの偉大さは、單にこのようなヴィジョンの優秀さにあるだけではなく、それを經濟理論の體系として育て上げていった専門理論家としてのタレントにあった。しかしここで問題となるのはその點ではなく、理論構成においてヴィジョンがどんな位置を占め、どんな役割を果すかという點に關するシムペーターの考えなのである。

ケインズの例でもわかるように、シムペーターにとっては、ヴィジョンは理論構成にとって缺くことのできないモメント（契機）である。それは「研究手筈のルール」とともに「科學的過程」の生きた全體をなすもので

ある。つまり、科學的過程というものは、ヴィジョンと研究手筈のルールの二つのモメントから成るものだということになる。だからヴィジョンは理論にとって本質的に生産的であり、理論構成の眞實性を保證するものだといわなければならない。

イデオロギーはそうではない。それは理論を歪め、汚し、科學者の作業過程に偏見と虚偽を混入させる原因となるものである。なるほどすべてのヴィジョンがいつも眞實であり、生産的であるわけではない。しかしヴィジョンというものは理論構成の有効性を保證し、その眞實性を約束するための基本的條件である。これに對して、イデオロギーというものはいつでも偏見と誤謬の源泉だというわけではないが、しかし本質的にそのようなものをもたらし危険があるとシムペーターは考へているようである。換言すれば、ヴィジョンは原則的に眞實性のカテゴリーと結びつき、イデオロギーは原則的に虚偽性のカテゴリーと結びつく。シムペーターがイデオロギー概念に對してヴィジョンという概念を設定し、その兩者をはっきりと區別していることはこれによつても明らかであろう。シムペーター自身の言葉をもつていえ

ば、イデオロギーは「科學の社會學」というディメンジョンにおいて受とられ、ヴィジョンは「科學的過程そのもの」のディメンジョンにおいて受とられる概念である。この二つはともに理論そのものの内部には属しない點で、一見似たところがあるようにみえながら、理論構成における位置と役割という點で、まったくちがった性質をもつものと考えられているのである。

もしヴィジョンとイデオロギーの區別に關するシュムペーターの見解を以上のように整理してみることが許されたとすれば、私たちはそこからいくつかの興味ある問題點をひき出すことができるであろう。

まず第一に、シュムペーターがここでとり上げている問題は、これまで理論認識と價值判斷の問題としてわが國の社會科學者の間でも熱心に論議されてきたものである。その價值判斷が理論家の單に主觀的な好みというようなものでなく、理論家の社會的地位とか、あるいはたとえ彼がそれに屬していなくともある特定の階級の利害とか、そういった社會的なものと結びついていると考えられるところに、いわゆるイデオロギーという概念が成立する。シュムペーターのねらいは、價值判斷ないしは

イデオロギーと純粹の理論との間にヴィジョンという概念を設定することによって、二つの點を明らかにすることに向けられているといえる。

その一つは、純粹理論といえども決してそれだけでいわずに宙に浮いているものではないことを明らかにしようとした點である。シュムペーターの理論家としての幅は、舊著「經濟學說の諸時期」(一九一四年)から新著「經濟分析の歴史」(一九五四年)に至る間に大きく擴げられたといえるであろう。その二つは、イデオロギー概念と理論の間にヴィジョン概念を設定することによって、

シュムペーターが理論から價值判斷を追放し、理論の純粹性を守り抜こうとした點である。しかし彼は單に狹義の經濟理論家たるに止まらないで、同時に經濟社會學者でもあらうとする。このような理論的な潔癖さと社會學的な視野の廣さとを、科學的な作業の世界で結合してみせてくれるものがシュムペーターのヴィジョン概念だといえないであろうか。私がひき出したいと思う問題の第一はこれである。

しかしながら、シュムペーターはこれによってはたして所期の目的を完全に果しえたであろうか。すなわち價

値判断を完全に理論認識の世界から追放することに成功したであろうか。私にはどうしてもこの疑問が残らざるをえないのである。シムペーターのいわゆる「科學的過程」において、ヴィジョンが形成される筋道とイデオロギーが形成される筋道とは、彼が考える以上に密接につながってはいないだろうか。このような疑問が起きてくるのはむしろ當然であるといわなければならない。シムペーター自身は、ヴィジョンが同時にイデオロギー的なものでありうることを認めて、イデオロギー的ヴィジョンという表現を使っているところもある。また、「イデオロギーが一〇〇パーセントまで立證可能な真理を含むこともありうる」ということを是認するなら、つぎのようにもいえるであろう——ヴィジョンとは本質的にイデオロギーであり、それは、人の社會的位置に起因する錯誤、ならびに人が自分自身または自己の階級ないし社會群および自己の階級ないし社會群の對立者について抱く願望の様態に起因する錯誤を、いかなる量でも含むことができるのである」(「思想」前掲論文七頁)と述べている。

このようにイデオロギーを虚偽、錯誤などの觀點から

理解しようとすることは、實はマルクスのイデオロギー概念からシムペーターがひき出したものである。というよりは、マルクスのイデオロギー概念に関するシムペーターの解釋を示すものである。しかしマルクスのイデオロギー概念はただ單にこのようなものであるうか。シムペーターはイデオロギー概念に關するマルクスの科學的業績を非常に高く評價する。そしてイデオロギーを虚偽性のカテゴリーで把握するのがマルクス自身の先見的な功績であるとみている。シムペーターはこのように解釋されたマルクスのイデオロギー概念に自分のヴィジョン概念を對置したのである。私たちはそこに、理論の内と外との両面からマルクスに對決を挑もうとする社會科學者シムペーターの意欲を認めえないであろうか。もしそうだとすれば、問題はイデオロギーの虚偽性ということにかかってくる。マルクスのイデオロギー概念についてのシムペーターの理解のしかたは、これです十分であろうか。私たちはこの視角からもう一度ヴィジョンとイデオロギーとの差別と同時に微妙なつながりを考え直してみる必要があるのである。

三 シュムペーターのマルクス

批判から何を学ぶべきか

マルクスのイデオロギー概念に對するシュムペーターの批判から、私たちは多くのことを学ぶことができる。何よりもまず私の注意をひくのは、シュムペーターのつぎのような一句である。

「マルクスはわれわれのためにイデオロギーを発見し、その性格を理解していた經濟學者である。フロイトの現れる五〇年前において、これはすばらしい業績であった。しかしいうもふしぎなことだが、マルクスは自身に關するかぎり、イデオロギーの危険に對して全然盲目であった。ブルジョア經濟學者や空想的社會主義者など他の人々だけが、イデオロギーの犠牲者とされたのである。」(「科學とイデオロギー」前出一〇頁)

マルクスの文獻に多少とも通じているものなら、シュムペーターのこの發言に驚きを感じない人はいないであろう。マルクスは彼自身の思想や理論體系をプロレタリアートのイデオロギーとして把握した。だからマルクスは彼自身の思想や理論體系のイデオロギー的性格をだれに

もましてよく知っていた。にもかかわらず、マルクスは彼自身の思想や理論體系だけが客觀的で眞實性をもつものだと主張した。つまりマルクスにとっては、思想や理論體系のイデオロギー的性格を認識するということは、直ちにその思想や理論體系の虚偽性を指摘することにはならないのである。ところがシュムペーターにとってはそうではない。したがってマルクスのこのような主張は、シュムペーターにとってはマルクスの大きな自己矛盾とならざるをえないのである。

なるほど、これは一つの自己矛盾であるかもしれない。しかしながら、もう一つの見方によればそれは自己矛盾でもなんでもない。シュムペーターのように、イデオロギー概念をもっぱら虚偽性の視點からとり上げようとする學者にとっては、ここに矛盾が存在するようにみえるのはむしろ當然であらう。けれどもイデオロギー概念にはもう一つの視點が含まれている。それは人間のもつ思想や理論の體系(すなわち觀念體系)が存在によって規定されているという視點である。そしていうまでもないことながら、この後の視點は前の視點よりもより基本的であり、したがってはるかに重要なのである。

意識が存在を規定するのでなく、存在が意識を規定するという、いわゆる史的唯物論の根本命題は、これまでいろいろとこの命題の反對者の側から誤解されてきたし、この命題の信奉者の側においても必ずしも正しく理解されてきたとはいえない。私のみるところでは、ここには哲學的には主體—客體の關係をいかに把握するかという問題があり、社會科學的には個人—社會の關係をいかに把握するかという問題があると思う。この根本問題を検討することなしに、私たちはいわゆる「マルクスの自己矛盾」なるものを原理的に解決することはできないけれども、しかしイデオロギーの虚偽性と存在被規定性という問題視點からシュムペーターの問題提起に答えることはできるのである。

まず第一に、存在が意識を規定するということは、だから意識は眞實性を含まないということを意味しない。イデオロギーは虚偽でもありうるが眞實でもありうる。といっても、この場合イデオロギーの虚偽性とか眞實性とかを思想や理論の體系の全體性において考察すべきであって、その部分性において考察すべきではない。シュムペーターによると、スミスの體系はイデオロギー的偏

見の被害を受けることが比較的になく、これに反してマルクスの體系はイデオロギー的にもっとも多くの被害を受けたものであった。だがシュムペーターによっても、スミスの體系にはうそ偽りがなく、マルクスの體系はうそ偽りの塊りだというのでは決してない。むしろその反對である。シュムペーターは理論家マルクスから非常に多くのものを學び、理論家マルクスの業績を非常に高く評價している。だからこそシュムペーターのマルクス批判には情熱が感じられるのである。要するに、ここでイデオロギーの虚偽性とか眞實性とかについて語る場合には、ある學者の思想や理論の體系をその部分性においてではなく、その全體性において考察するのだからばならないことがわかる。イデオロギー的觀點とはおよそこのようなものである。

このような認識から私たちの問題把握は一步前進する。すなわちある學者の思想や理論の體系を全體として規定していると考えられている存在とは何かという問題が出されなければならない。それはいうまでもなく歴史的社會的存在である。人間の思想や理論はたとえそれがどんなに歴史や社會を超越したようにみえようと、あ

る特定の歴史と社會の中で形づくられ、そこである具體的な役割を果す以外のものではありえない。したがってそれは歴史と社會の状況の變化につれて、またちがった意味をもち、ちがった役割を果すことになる。このような歴史主義的思想がマルクスの存在概念に含まれていることはいうまでもないが、この思想をおし進めていけばマルクスの思想や理論もまた歴史的相対的な妥當性しか要求しえなくなるはずだと考えられるであろう。しかしながらマルクス主義の歴史觀や社會觀の中には、單に相對主義的な思想のほかに、もう一つ別の思想すなわち啓蒙主義的な思想が含まれているので、この點の理解のしかたがなかなかむづかしくなる。シュムペーターのような批判は、マルクス主義における相對主義的な思想面と啓蒙主義的な思想面とを分離してみようとするところから出てくるものであって、それがかえって私たちの問題意識を刺戟するものだといつてよいであろう。

ところでシュムペーター自身の歴史觀はどうであるかという、少なくとも經濟理論の歴史に關するかぎり、彼は啓蒙の進歩史觀を信奉しているようにみえる。經濟理論の歴史は理論の進歩の歴史であるし、またそのよう

なものとして扱われなければならない。これがシュムペーターの經濟學說史に對する基本的な態度であり、根本信條であるようにみえる。つまり歴史はこの場合單線的に把握されるのであって、マルクスのように螺旋的に把握されるのではない。だからシュムペーターにとっては、虚偽は虚偽であり眞實は眞實である。しかしマルクスにとっては一つの時代の眞實は他の時代の虚偽となり、一つの時代の虚偽はつぎの時代の眞實となりうる。もつともシュムペーターにもマルクスにも同様にあてはまることがある。それはイデオロギーとして、すなわちその全體性においては虚偽となつてしまつたものでも、もつとちがつた立場からそれを部分的にとり入れ、評價し、利用していくことができるということである。

このようにみてくると、イデオロギー概念には虚偽性の面と眞實性の面とが結びついて含まれていることがよく理解されるであろう。そしてマルクスがイデオロギー概念の確立の上で示した功績は、私の考えでは二つあるように思う。すなわち第一には、それまでイデオロギーといえはなにか空疎なもの、現實はなれのした詭辯家たちのたわごとのように理解されていたものを、ここに述

べたような意味で歴史的社會的現實の基盤の上に据えたことにある。この意味では、どんな思想や理論の體系も、歴史と社會の現實の中では、全體として一つのイデオロギー的性格を免れることはできないことを彼は明らかにした。だからたとえばマンハイムなどのいうように、社會のどこかにイデオロギーからまったく自由な知識階級というものが存在していて、それらの人たちだけが客觀的眞實性をつかむことができるというような考えは成り立たないことになる。シュムペーターの巧妙な比喩を借用するというなら、マルクスは後のイデオロギー論議のために、あらかじめこのようなマンハイム製の非常梯子をとり外しておいたのだということができる。

第二にもう一つ重要な功績がある。それはマルクスがこの點からさらに一步を進めて、イデオロギー概念を社會學的に（より正確には社會科學的に）基礎づけたという點である。存在が意識を規定するとマルクスがいったとき、それは歴史的存在であると同時に社會的存在であった。いや單に社會的存在というようなものでなく、すぐれて經濟的な存在であり、市民社會的な存在であり、體制における人間存在であった。歴史的社會的存在とい

うもののこのような把握のしかたは、一言でいえば、現代の人間と社會についてのマルクスのヴィジョンを示すものにほかならない。資本の支配する體制の下では人間はいやおうなしにその人間性を剝奪され、いわば一つの社會的自然物に化石する。これを初期マルクスは哲學者らしく人間の自己疎外という言葉で表現した。そしてマルクスは人間自己疎外の原因を人間の社會關係（階級關係）のうちに求めることができると考えることによつて、哲學者マルクスから社會科學者マルクスへと脱皮していった。このことはここに改めていうまでもないであろうが、しかし私は尋ねたい。哲學者マルクスを社會科學者マルクスへ脱皮させていったものは何であったか。私たちの當面の問題意識からみて、それはマルクスのヴィジョンであったのか、それともイデオロギーであったのか。私はこのように尋ねることによつて、私の問題をさらに一步前進させることができると思う。

この設問に對する私の解答を先廻りしてここに記しておく方がよいように思う。それはマルクスのヴィジョンでもあったしイデオロギーでもあった。マルクスは資本主義體制の下では人間の自己疎外が階級關係によつても

たられ、階級関係によってその極限にまで完成されることをみた。これはマルクスのヴィジョンである。このヴィジョンを社会科学に基礎づけるためには、価値論や剰餘價值論や資本蓄積論や窮乏化論やその他一連の理論の體系を必要とした。しかし「はじめにヴィジョンありき」である。この意味で、シュムペーターのいうとおり、ヴィジョンは科学的分析以前の認知であるといつてよい。しかしながら、「哲學はプロレタリアートの頭脳である」という思想に到達したとき、マルクスのヴィジョンは一つのイデオロギー的自覺に達したといえないだろうか。そこからマルクスは思想や理論の體系のイデオロギー的性格を社会科学に認識しようとする立場に到達したといえないだろうか。そこからマルクスのイデオロギー的闘争が生まれてきたといえないだろうか。

このようにして、シュムペーターのいわゆる科学的過程の分析において、もし私たちがヴィジョンの重要性について語らなければならないとすれば、私たちは同時にイデオロギーの重要性についても語らなければならないことになる。もしヴィジョンを科学的分析以前の認知であるとすれば、イデオロギーもまたそのようなものである。

はないのか。このような疑問が當然に起らざるをえないであろう。

だがヴィジョンはそのままイデオロギーではないというふうに考えることもできる。ヴィジョンは科学的過程の一断面である。これに對してイデオロギーは科学的體系そのものの社會學的（正確には社會科學的）根據づけの問題にかかわっている。私たちはヴィジョンにおいては理論に接觸するが、イデオロギーにおいては歴史觀と社會觀の問題に接觸するといえる。ヴィジョンとイデオロギーは科学的な作業の中では不可分に結びついているけれども、「科學の社會學」という立場からはそれぞれそのデイメンジョンを異にするものといわなければならない。イデオロギーはヴィジョンに優位するものといわなければならない。かくて理論におけるヴィジョンとイデオロギーの問題は、ヴィジョンに對するイデオロギーの優位の問題として把握されるようになる。つぎにこの點を考へてみることにしよう。

四 イデオロギーの優位ということについて

ヴィジョンはいつでも理論に密着して考えられるもの

であるのに對して、イデオロギーは必ずしもそうではない。一面では理論に密着しながら、他面ではそこから超越している。そこにイデオロギーの理論に對する二面的な關係が指摘されうるであろう。理論に密着しているという關係からいえば、イデオロギーはヴィジョンと同様に、理論分析にとって有益であり、理論構成にとって生産的な役割を果すものである。しかしもう一つの關係、すなわち理論から超越するという意味においては、イデオロギーはしばしば理論分析にとって有害であり、理論構成を歪曲するものだといわなければならない。

どうしてこのようなことが起るのか。それはすでに述べたことからほぼ明らかであるように、シュムペーターのいわゆる「科學的過程」におけるヴィジョンとイデオロギーとがそれぞれ占める位相のちがひということから起るものと解されうるが、そのほかにもう一つ忘れてならないきわめて重要な問題點があるのである。結論からさきにいえば、それはイデオロギーが政治の問題に直結するものであるのに對して、ヴィジョンの政治に對する關係はそれほど直接的でないということから出てくるものなのである。

ここでふたたび、存在は意識を規定するという史的唯物論の根本命題に立歸ることにしよう。そこでの存在は歴史的社會的存在であつた。しかし歴史的社會的存在というような把握のしかたでは、まだ十分に歴史的現實の具體的な把握であるということとはできない。市民社會とか、資本主義體制とか、そのような社會科學的な觀點からいえば、いわゆる歴史的現實なるものは、政治的經濟的現實として把握されなければならないのであつて、單に歴史的社會的現實というような表現は、たとえまちがつてはいないとしても、現實の血の氣の失せた表現であることは争えないのである。政治と經濟を離れて現代社會の具體的な現實をつかもうとするのは、平和の理念のみによつて東西兩陣營の共存の可能性を推論するのと同様に、結局一つのむだ骨折りとなるほかはなからう。私はここにいわゆる存在というものの意味をこのように理解すべきものだと思ふ。

人々が政治と經濟との密接不可分なつながりを確認し、政治と經濟とが近代社會において占める意義の重要さに氣づくようになったとき、そのときはじめて私たちの社會科學が成立した。そして經濟學は政治經濟學とし

て誕生した。これは私たちの今日の常識である。この常識は、私がいま指摘したイデオロギーの優位という問題を解明するのに役立つのではなからうか。

さてそこで、イデオロギーの優位という問題を現代社會における政治と經濟の支配という觀點と結びつけてみる必要がある。よくいわれるように、經濟は政治の中核をなし、政治は經濟の集中的表現である。だからイデオロギーというのは、この面からみれば、階級的利害の表現であり、黨派的立場の確認であることになる。もし現代史の過程というものが、經濟的な利害と利害との戦い、政治的立場と立場との争いによって形成されていくものとすれば、現代史のイデオロギー的把握というものは、歴史をこのような形成過程に即して把握するということを意味するものであって、そのこと自体はなんら非客觀的でも非科學的でもないのである。とくにもし現代史が大きな社會的變革の一時期にさしかかっているものとすれば、歴史的過程のイデオロギー的把握というものこそ、かえって歴史的現實の具體的な認識を保證するものだといえることができるであらう。總じてイデオロギーというものがやかましい論議の對象となると

いうことが、變革期の一特色をなすものであって、この意味では、イデオロギー論というものは變革期の指標であり、變革期はイデオロギー論を求めるものだといえることができるであらう。

ここからして二つのことが明らかとなってくるように思われる。一つは、イデオロギーの優位ということは社會科學者が現代史に對決しようとする歴史意識の根元性ということを物語るものであり、いま一つは、社會科學者はその歴史意識を政治と經濟の現實の中で鍛えあげなければならぬということを物語るものである。この點からみればすぐれた社會科學者はすべてこのように根源的な歴史意識と現實的な社會感覺とをもって時代に對決しようとしたものだといえることがわかるであらう。スミスがそうであったし、マルクスもそうであった。マックス・ウェーバーもそうであったし、シュムペーターやケインズもまたそうであった。たとえシュムペーターがどんなに熱心にイデオロギーの有害さを力説したとしても、彼もまた現代社會科學者の運命を免れることはできないのである。また以上のことから、すぐれた社會科學者においてはすべてイデオロギーとヴィジョンが不可分

に結びつけられていたことが理解されうるであろう。マルクスはおくとして、私たちはとくにシュムペーターの業績を読むときにこのことを感ずる。これは純粹理論家シュムペーターに對する皮肉ではなくて、社會學者シュムペーターに對する私たちの讚美の言葉となるべきものである。

しかしイデオロギーは理論に對していつでもまったく無害でありうるだろうか。最後にどうしてもこの問題が残らざるをえない。イデオロギーはヴィジョンとして、すなわち科學的分析以前の認知として、理論構成にとりいわばライトモティーフの役割を果すものと考えられる。ライトモティーフがなければ作曲は不可能であろうが、それだけで作曲が行なわれるものでないことも自明である。だからそこに作曲技術の問題が、作曲手續きの問題が生まれてくる。經濟理論構成においてイデオロギーないしはヴィジョンの果す役割もこれになぞらえて考へることができるであろう。シュムペーターが科學的過程における「研究手筈のルール」と呼ぶものは、ここにいわゆる作曲技術上の約束に比すべきものであらう。

シュムペーターは理論をイデオロギーの害惡から守る

ために、理論のトゥール性ということを強調する。もう一度彼の巧妙な比喻によると、理論はステンレス製でなければならぬ。彼によると、理論體系というものは精密に組み合わされたトゥールの箱でなければならぬ。ここからしてシュムペーターは、現在の經濟學者が政治的「でなく」「純粹」でなければならぬ。たとえば限界效率とか、代替性とか、弾力性とか、そういった一連のトゥール概念によって理論は組み立てられていなければならないというのである。マンハイムからイデオロギー概念の非常梯子を奪い取ったシュムペーターは、イデオロギーと理論とを切斷することによってイデオロギーの焰からその身を守ろうとするかのであるが、しかしこれははたしてどこまで可能なのであらうか。

(註) この點についてロンド・ミークがシュムペーターに加えた批判は私たちに教えるところが非常に多い。私はこの一文をちょうど書き終ろうとしていたときに、ミークの論文をみる事ができた。基本的に重要な點で私の考へは彼の考へと一致するところが少なくない。しかしいまはそれらのことに言及する餘裕がないから、ただそれだけのことを述べるに止めたい。(詳しくは R. L. Meek: Is eco-

nomics biased? A heretical view of a leading thesis
in Schumpeter's history [久保田明光教授還暦記念論文
集]をみよ)

理論的トウールの組み立て箱の中には、どんな組み立て箱にはめこんでもその効率を發揮するような性質のものも少なくないことは認めなければならない。このようなトウールは、あたかもガス燈から螢光燈への技術的進歩について語ることができるのとまったく同じ意味で、たえず進歩していくであろう。シュムペーターが「經濟分析の歴史」を書いたときに、その導きの星となったものはこのような技術進歩の見方であったことはすでに述べた。しかしながら、どうしてもトウール性のカテゴリ―だけでは割り切ってしまうことのできない諸概念が、社會科學の組み立て箱の中には非常に多いのであって、とくにその概念が基本的なものであればあるほどますますそのような性質をおびていることを私たちは知っている。

たとえば資本、所得、利潤、利子、質銀、地代等々。たとえば價值、貨幣、價格等々。近代經濟學者とマルクス經濟學者との意見のちがいは、物財の代替性とか、需

要の弾力性とか、そういった經濟諸量間の相關的關係を捉えるトウール概念においてみられることはまず少ないのであって、兩者の意見のちがいは、このような經濟諸量を受けとめる容器そのもののうちに存在するのである。それが前記のような基本的概念なのであって、そこでは經濟の量的關係ではなく、むしろその質的關係が問われなければならないのである。近代經濟學者たちはできるだけ自然科學的な概念を使って、經濟學の基礎に横たわっている質的把握の問題を回避しようと努めているけれども、しかしどんなに純粹な經濟學者でも實際にはなかなかそれだけではすまされるものではない。たとえば資本係數は一つの關係概念であろうが、經濟の成長率という概念はすでに質的關係を豫想している。それは經濟有機體が不斷に成長するものだという動かすことのできない一つの價值評價を含んでいるのである。

以上の第一の論點のほかにもう一つ第二の論點がある。それはいま述べたような量的ならびに質的諸概念を全體として一つの體系に組み立てていこうとするとときに起る問題である。さきほどの作曲の例でいえば、一つのメロディを發見するためには作曲家の質的洞察力が必要

であるが、それを一つの樂曲にまで構成することになれば、それはもはや音符と音符との量的結合關係でないことはいうまでもない。ここでは作曲家のヴィジョンが大きな役割を果しているであらう。そして社會科學においては、藝術の場合とちがって、科學者の仕事を導き勵ましてくれるヴィジョンというものは、もっとも直接的な結びつきにおいて科學者のイデオロギーと握手するのである。

だがそれであるからこそ社會科學者はイデオロギーのとりことなり、社會科學の理論はイデオロギーによって汚されることが少なくないということは、依然として眞實であらう。私たちは一方ではイデオロギーの有用性を肯定し、他方ではイデオロギーの有害性を承認しなければならぬ。これはたしかに明白なパラドックスである。しかしこれは社會科學者にとっては避けることのできないパラドックスである。マルクスのエピゴーネンがそれ（パラドックス）を示しているように、シュムペー

ターのエピゴーネンもまたそれ（パラドックス）を示している。マルクスとシュムペーターを對比させてみる興味は實はこの點にあったのである。

それでは私たちはどうしたらこのパラドックスを解決することができるか。それは單にイデオロギーやヴィジョンの段階に止まるのでなく、それを理論の中で實踐してみせることである。單にイデオロギーとイデオロギーの優劣でなく、理論的構築物の優劣によって雌雄を決するほかはない。このようにして理論はイデオロギーを裏づけると同時に、逆にイデオロギーは理論を指導する。私はイデオロギーの優位という問題をこのような方向において研究すべきものだと思える。

以上本篇は社會科學者マルクスと社會科學者シュムペーターとの比較論のための序論的考察をなすものである。

(一橋大學教授)